



10

「そう、人の素晴らしさ。それは勇気を示し顕わす可能性ね」

取り留めもない会話の断片。

これは、婚礼前夜に、秋の星空の下で、縁側に座って二人で話したことだったように思えた。

目の前の盃を、その緋色の瞳で見つめて、見下ろして。春花は脳裏に自然と浮かんできたのは、そんな雪絵と交わした会話だった。

「勇気.....」

「それは時に、未来をも超えていくことが出来る力だと、私はそう思っているのよ」

春花は――いや、春花だけでなく、血刀の血約能力、未来視・重ねを我がモノとした歴代の獅士堂緋蓮たちは、己が血刀で太刀合い、対峙する者達に、ほぼ絶対的な先を視る。

そこには、視るたびに僅かの失望を含んでいたことを、彼女たちは偽ることなく知っている。

相手が斬られるヴィジョン。高次の勝利のための戦闘、斬撃予知。

それと重なるために血刀を振るうことで付与される、未来を視通すという予知能力。

対峙し、自分が果てる以外にはほぼ絶対的な勝利が約束されてしまう。それは、刀が与える命の危機感が薄まり、やがて互いの命を賭けているという太刀合い本来の在り方を揺るがす機微が、心の片隅に巣食うことになる。

彼女たちは、それを知るからこそ、その怯懦と斬り結ぶ。

無論、二十五代におよぶ血刀を振るう者の中には、その勝利の安心感から、相対する者を軽んじた武俠もいただろう。だが、それを含めても、獅士堂緋蓮は自らの心が未来視という必定の前に、従順な僕^{しもべ}として刀を振るうことから、離れ、超えようとした。人としての尊厳と誇りを以って、太刀合い向かい合う

者たちへの、心からの尊敬を抱き続けることを目指し、求めた。

心無く人を斬ることを忌む心は、太刀合いに勝つのが当たり前だという驕りからも生じている。

究極、血刀は己が身に人間の血をすするためだけに在る吸血刀だ。故に、遣い手の心や想いを他のどんな真鍮の刀よりも軽んじる。純粹過ぎる、斬るためのモノ。そこに心は無い。

だからこそ、ともすればいつしか、血刀を遣う者の心までが血の味と匂いに毒され、侵され、蝕まれ、心無く人を斬るモノへと変貌させることになる。

「けれど、それでは駄目なのよ。だって、私たちは武俠であると同時に、人だもの。人を愛する、人だもの。人を尊敬し、人の想いを知り、私の想いも知り、それを尊ぶ人だもの」

「人を視ないって……、自分のことだけって、楽な気もするけれど、哀しいことだと、私も思う」

「そうね。嬉しいわ、雪絵。そう、だからね、必要になってくるの。己の弱さに打ち克つ強さが。死滅する心の輝きを知るからこそ、その死に抗う心。輝きという価値を守る、抗う力が」

「それが、勇気なんだね」

春花は、雪絵の黒い真珠のような瞳を見詰めた。キラキラと……花火を反射しているわけでもないのに、煌めいている瞳。生气と、力と、希望に満ちた瞳。

「多分ね、血刀とともにある私たちの未来視能力は、やがて自らをも蝕み滅ぼす必定を超えていくためにある。私たちはだから、次代の子を求め、見い出すのよ」

だからこそ、春花は雪絵がそうなれるような機会を作り出す。

――斬られ、血を流す自ら。その痛み。意識が薄れていく、途切れていく感覚。そんなヴィジョン。

その『視たモノ』が、目の前のそれと、かっちりと嵌り合い、その適合と合致が成された瞬間、その刻が来たのだと……視た未来が訪れるのだと、春花はそう理解した。

これは、賭けだった。

ここで、盃を受けることで、どういう流れかで自分は死ぬことになる。

そして、肝心なのは、その後だ。

その後、獅士堂の頭が婚礼の席と、その波及で命をおとすこと——その波紋。それが、どの程度の規模になるかは、想像がつく。だからこそ、先代はその未来視について、また春花の結婚という選択に対して、かつての汀の時代を想起せずにはいられなかったのだ。

必定に身を委ねることで、春花は自分よりも、未来の子らが希望を叶えてくれることを願い、望んでいる。

春花は、必定に侵された人間だ。かつて、自らの身が傷つき、害した後、子が産まれないという必定を彼女は突き付けられた。これは、今に至るも逃れようのない、変えがたい必定だった。生きていて、万に一、億に一、兆に一のキセキに遭うことでしか、覆せない必定。

だが、春花は屈しなかった。

思考を止めず、違う方法を模索した。

子を産めない。その必定があるとして、しかし、自分が必定を超えて生きられないことはないのではないか。次代の子を育み、その子が必定を超える強い人間になることを導く——全ての獅士堂緋蓮が願い、目指したことを、自分が出来ることを諦念とともに仕舞わなかった。

人には、弱さがある。心無い傲慢さや、人を傷つけてしまう愚かさがある。だが、それでも人には可能性がある。輝きと強さがある。

そして、自分にもそれはあると信じていた。

多くの人を視た。中には——いや、その大半が、己の抱える必定に抗し切れず、つぶれて行った。哀しい道を辿り、悲嘆と後悔と苦しみの中、命を畢えていった者が多々いた。

だが、その中に、人の多くの在り方の中に、その哀しい必定の縛鎖を破り、抗い難いモノの想像を超えて輝く者達が生じることも、春花は視てきた。人は、因果と必定を超えて輝きに至る——そうした強さを生じさせ、そう在る者が生

まれ続けるのもまた、人のスガタなのだと春花は刀に生きるなかで知ったのだ。

だからこそ、人間は人間を買いかぶり、希望を持ち続ける。

春花にとってそれは――輝きとは、自らが必定の渦中にあっても、その必定を超える者を導くことだった。それが成されて初めて、自分も必定に抗え、超えたのだと言える。そう、諒解できる。

盃を口の前に動かす。

盃水が、ゆらゆらと揺れ、その中でも水面を鏡にする。

（私は、抗い切れるかな。超えられるかな。でも、それはどちらでも、あの子の未来よね。私は、自らの心に……次代の子に、それを託すために、出来ることをしたと思うから……）

水面に映る式場の灯りと金の装飾のキラメキが、自らの瞳の緋色と混じって光りを散りばめている。

美しい水面だ。そして、美しい緋色の灯だ。

静かな水面が、『死』を映していることを除けば、結婚式に相応しいといえた。

右隣りでは、同じく盃を手にした、春花の夫となる男、湊奈人が立っている。

その手が、彼の口に盃を吸い寄せる。

春花は、自らも自然に盃に口を近づける。

躊躇いは、ない。

残される者たちに、憂いはないとはい切り切れないかもしれないが。

（でも、左ノくんがいるし、仁美ちゃんもいるし、白峰さんも、皆もいる。だからきっと、あの子は良い方向への選択をしてくれる）

（これは、未来視ではなく、私があの子の母として、近くにあって来て、あの子を視て来て思うこと）

（あの子はきっと、良いようになってくれる。最良目かもしれなくてもいい。私は、そう信じて――逝ける）

だから、この口づけを躊躇わない。

春花は、そうして誓いの盃に口をつけた。

薄く、瞼をとじて。

そして、三々九度を行い開いた時、その寿盃の酒は喉を通り、胃に納まった。瞬間、僅かに焼けるような感覚が全身に走る。しかし、すぐにおさまリ、何事も無かった。

「……………———」

だが、異変は起こった。

春花の身を、疲労感が襲った。春花はそれに心当たりがあった。

(これは……、この酒には……!?)

そして、次いで隣で立つ湊奈人が、身を震わせ、手を震わせ、盃を手からこぼれ落とした。そして、ぶふ、と引き結んだ口から何事かを噴き出した。

春花は、その色を見て知る。血だった。

仏前に血が吹きかかる。

吐血だ。

「湊奈人さんッ!!」

春花は即座に、いまや倒れて身をぴくぴくと痙攣させる夫となるべき男に縋りつく。

湊奈人の突然の異変を目にし、参列している一同がどよっと声をあげ、身をひるがえす。

彼の口の端から溢れ出ている血で、春花は確信する。毒だ。

そして、おそらく自分の盃にも（それとも酒か？）同様に毒が盛られていたのだと悟る。だが、春花の体には、毒耐性があった。鯨を麻痺させるほどの毒でも刀が振るえるほどの耐性——春花は毒で死なない体なのだ。

そして、気付く。

これは、この結婚式を迎える者を、両方とも亡きモノにしようとした謀りだ、と。

視界の隅で、皆が騒ぎ立てる中、一人昏い笑みを浮かべている男がいる。その男は、場の異変を待っていたかのように、即座に側近を式場の外に走らせている。

ざわざわとした声は、倒れた湊奈人の容体よりも、原因と責任の所在を求めて、徐々に罵声に変わって行く。

辰ノ神の新郎が倒れ、獅士堂の新婦だけが立っているのはどういうことだ、という誰かの声。それが、そのままこの謀りのこれから先を暗示していた。

春花は考える。両方を毒で一度に亡き者に出来ればよし。しかし、与り知らぬ理由で春花に毒が利かず、彼女だけが生き残ってしまったのならば、それならそれでこの場で立つシナリオがある。それを回避する術が、今の自分にあるだろうか。その猶予は？

「謀りだッ!!」

場を一瞬にして黙りこませる叫びが起こった。

式場中の視線が、声の主に集まる。

そこに立つのは、高杉飛呂人だった。

彼は、式堂の外から戻ってきた側近から刀を受けとると、赤い道を前へと進む。すらと刀を抜き放ち、ぬらりと刀を光らせ、言う。

「これは婚礼を利用した獅士堂の^{はかりごと}謀だッ！ 兄貴の酒に毒を盛って、殺したのだ！ 酒を用意したのは獅士堂側だっただろう!」

飛呂人のその言葉に、参列していた獅士堂側の幹部たちから批判の声があがる。

その場の混迷ぶりに、祓刀は両者を一旦落ちつかせようと切り出す。

「待て、飛呂人。そうだったとして、それで何も毒を盛ったという証拠はない。今は落ち着いてことの真偽を……」

「うるさい!! 俺は今、怒りに震えているんだッ!!」

飛呂人の目が危険な彩を帯び、刀が横に薙がれた。鮮血が散った。

怒号があがった。飛呂人が刀を返す。

獅士堂の俠たちが、この場の危険度を痛感し、動き出す。そして、祓刀が上半身から夥しい鮮血をながし、膝から伏した。

「姐さん!! 下がってください!!」

踊り出した幹部たち——その最前は室泉だった。飛呂人は丸腰の彼らに対し、

無慈悲に斬りつけた。事態を怯えて視ていた僧侶たちが、今頃になって悲鳴をあげた。

春花は、静かに湊奈人の顔が青ざめ、血の気が失せていくのを視ていた。その顔に、手を這わせて詫びるように額を重ねた。

その屈み、低くなった春花の頭に、血に塗れた醜惡な感情の載った刀が、振り下ろされた。

1 1

「……………、眠っていたか」

うっすらと意識が戻って行く。かすむ視界も、二度、三度と瞬きをすると、鮮明になって……そうしていると、自分が何をしていたかを思い出してくる。

身を起こす。夕暮時の静けさと、この時間は小さく慎ましやかに鳴く虫の音が耳に届く。

雪絵は、離れの自室にいた。

順を追って、今日のことを思い出す。

「何か、午睡なんて珍しことをしたから、変な気分だよ……」

えっと、と首を傾げる。

今日は、そう、何をおいても、母、春花の婚礼の二日目が行われる日だった。それで、二日連続日の出前から起きて、春花はあわただしく出掛けているのだ。それで、自分は今日は、午前中は早朝稽古をした後は、仁美が屋敷を訪れたので、一緒に大広間の式後宴会の準備の様子を眺めて、話をしていた。それから、昼食を食べて、いつものように独り稽古もして、そして休憩に普段のように縁側で読書をしていたら、珍しく眠気に襲われたのだ。けれどこれは、連日の夜更かしと早起きのせいだろうと、寢床の準備をしてくれた左馬ノ介が言っていた。

そうして、自室で少し眠ることになった。薄い布団をはおり、仁美からもらったクッションを枕にして、僅かの間もなく寝入ってしまった。

「ふああ……」

そこまで思い出して、ひとつ大きなあくびをする。

部屋にある時計を視ると、針は5時を過ぎていた。

呑気なことだと雪絵は自分でも思うが、軽く湯を浴びて夕餉時だな、と身についた習慣のまま考える。

しかし、そう思って、ことはそれよりも、刀郷の東西トップの婚礼が首尾よく済ませられたかどうか気がになりだした。武侠たちや、スジ者。組とシマ。そして、郷の多くの堅気の民衆が注目している筈なのだ。その当日に、午睡をしてすぐさま風呂とメシのことを考えている自分に、頭をはたきたいような呆れを感じる。

ともあれ、そうしていても始まらない、と雪絵は着衣の裾や襟をただし、鏡でぱっぱと髪を梳き、身なりを整えると、自らの部屋を出た。

離れの廊下を歩く。離れの玄関を通り、渡り廊下を通過し、本邸に入る。

組内は、妙に静かだった。

いや、人の声はする。だが、潜めているような……何かを探っているような。困惑とも、焦燥ともとれる、そんな思いが入り混じった気配が、所々から毒ガスが漏れだして身を苛むように拡がっている。雪絵は少し不安になって、足を緩める。

考えてみれば、もう夕方だというのに、婚礼を終えた幹部連中や、青刃の警護の者たちが帰ってきていないようだった。春花は新婚初夜を境界線上の宿で新郎とともに過ごす、という話は聞いていたので、戻らないにしても、これはおかしいと雪絵は感じる。

二日目の式に参列、ならびに警護に出向いた者たちも、とうに帰ってきていてもいい時間な筈だった。

雪絵は胸にもやもやとした感覚が広がるのをなだめ、大広間に向かう。式の後夜祭ともいえる宴を催す予定の場だ。そういえば、そこならば仁美や左馬ノ介がいるかもしれない。それを捕まえて、事情を聞き出すのもいいな、と雪絵は考える。

大広間には、宴会を待つ武俠がいくらか居た。

話を聞く。

やはり、挙式に向かった連中はまだ帰ってきていない。そしてそれは、話をする組員たちにしても雪絵同様に不安を感じていたようだ。どうやら、屋敷にいる幹部が畔形衆を走らせ、当の式場のことを調べているという話だ。

雪絵は、そう聞かせてもらったことに礼を述べると、広間を見渡す。そして、次に広間にいない白峰を探して歩き出した。

この時、雪絵は歩くごとに不安が加算されていく気分だった。歩を進めるのに足を動かすたびに、誰かが――皆がこの婚礼に関して口にしていたことが思い起こされてきた。

『反対だ』

『どうなるかわからない』

『そんな危ないマネは止めてください』

『相手が誰か考えたら、賛成できない』

『その男は、いや、向こうはあの辰ノ神ですよ』

びくり、と雪絵は水音が聴こえて身を竦ませる。

本邸の外縁の廊下から、広い庭の池が視える。何かは分からないが、何かが池に落ちたのだろう。

「池……水、か……」

嫌な感じがした。

『水が混じる』 という誰かの言葉が脳裏に浮かぶ。

“水” とは、辰ノ神のことだ。

その組がどういうモノかは……自分たち獅士堂とこれまでどういう関係にあったか……雪絵とて話には聞いている。

気付くと、じつとりと背中に汗をかき、胸がしまり、鼓動が高く鳴っている。嫌な感じがする。

「左ノ……や白峰さん、どこだろう……」

そうして、ややおぼつかない足取りで本邸中を歩き回り、やがて正面玄関に

辿り着く。

そこで、ようやく聞き知った声を耳にした。それは、驚きと、震えと、押さえるような慎重さが響きにあった。耐えがたい怒りと後悔がない交ぜになったような声だった。

話している内容までは聞き取れない。その声音に、不安を更に煽られた雪絵は、白峰の姿を視ようと表に出る。

もうずいぶん薄暗くなっている外の空気の中、篝火を灯した正門の前に、数人の俠たちが立って、話し込んでいた。そこには、白峰の姿があり、雪絵から視える中にも見知った幹部や、何度か仕事で助けてもらった吽形衆の有角の姿もあった。

その有角が、目ざとく後方から歩いてくる雪絵を認め、苦しそうな声をあげた。

「お嬢……」

「……む、雪絵か」

白峰も振り返り、雪絵の姿を視た。だが、この時、雪絵も白峰も、互いが互いの顔を視て、その顔色が普段の平静さを欠いていることを一目で理解した。

それでも、白峰は保護すべき子供に隠し事をする正しい大人のように、言った。

「どうした、雪絵。そろそろ夕餉の頃だろう。中に入っている」

しかし、雪絵は白峰の隠さんとする内容は兎も角、彼が何かを隠したいと思っていることを、簡単に見抜いた。そして、例えそれが今この場しのぎであったとしても……いずれは語らなければならない類の内容であり、この時の白峰の対応が適切であったとしても……見過ごせる類のことに感じなかったのだろう雪絵は、この時間い返してしまった。

「白峰さん……何があったの……？」

何かが起こったことは、もう疑いの余地がないと見抜かれているモノ言いだった。

白峰としても、今、吽形衆が走り持ってきた情報を、そう長くは留めておけ

ないことを十分に理解している。しかし、だ――。

しかし、それを今こんな表情をしている幼い迷い子のような有り様の少女に對して、はっきりと告げることがとてつもなく心苦しかった。

だが、答えを待つ雪絵が、白峰のその逡巡を待ってはくれなかった。

「母さんに、何かあったの……？　ねえ、どうなの？　答えてよ、白峰さん!!」

雪絵にしては珍しく、言葉が後にいくほどヒステリックな叫ぶような言い方になっていた。それに対して白峰は、心の準備を突き崩されたように、うつむく。

そして、口が裂けてもいえないことを言うように、上下の口唇を割いて、それを声にだした。

「春花が、斬られた」

辺りが、静まりかえっていた。だが耳に入る音が煩わしい。パチパチという、篝火の薪が燃え爆ぜる音や、控えめである筈の虫の音さえも、何か今語られた事柄に対して煽り、囁し立ててきている気がして、苛立たしいモノに感じられた。

雪絵は、言葉の内容を、すぐに理解できてはいた。

だが、それを突き付けられた雪絵の気持ちが、周囲の音を嫌っていた。

武俠ならば、斬られることはある。斬るのなら、また斬られることも覚悟し、承知のうえで生きなければならない。

――それは十分わかっている。当たり前のことだ。

けれど、今は、春花は、太刀合いに赴いたのではなかっただろう。

「……………なんで」

「雪絵……」

白峰の眼に映る、眼前の少女は、足元が震え、手先も所在を求めるようにふらふら動き、胴と肩もゆらゆらとして……何より、その上に乗っかっている顔は、青く、青く、そして、白味がさしてきていた。

「なんで！　なんで！　なんで！　なんで、なんで、なんで、なんで、なんで、
なんでなんで、なんでなんでなんでなんでなんでなんで、なんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんで、なんで.....っ　なんでよッ!!」

「落ち着け、雪絵.....ッ」

「なんでよッ!!　おかしいでしょ!!　なんでこんなことになるの!!　おかしいよ
ッ!!」

白峰の周りの侠たちが、気遣わしげに雪絵を見遣る。誰もが、かける言葉が見つからない。

しかし、彼らとて、今の雪絵のように理不尽と不条理に怒りの声を猛りあげたいのは同じなのだ。

「今は、お前に話すのみだ。だから、静かにしていろ。おっつけ、東のシマからこちら、式に加わっていた者たちの生き残りが戻ってくるそうさ。おそらく、春花もだろう。我らは、そこから考えねばならん。起こったことはもう取り返しようがない。この縁談は、そういう危険性を孕んでいたのだ。分かってはいたのだ.....」

口惜しそうに、白峰は下を向いて吐き出した。

雪絵は、そんな侠たちを視て、傷ついているのは自分だけではないと知るが、それで彼らのように振る舞えない自分を理解していた。

頭の中は、赤く、赤く、真っ赤だ。顔は熱く、寒い。躰は力が入らず、倒れそうさ。

だが、それでも。これでも、まだ理解が追いついていないのだと、雪絵はこの後、知ることになる。

.....続く。